

平成30年室内環境学会学術大会報告

大会長 鍵 直樹（東京工業大学 環境・社会理工学院）

平成最後の平成30年室内環境学会学術大会が、平成30年12月6、7日に東京工業大学大岡山キャンパスで開催された。本学術大会のテーマを『室内環境の見える化』とした。室内環境の研究領域としては、1990年代後半のシックハウス問題では化学物質が、そしてカビやダニなどの室内微生物の存在もあり、そのほかにも温熱、光環境、騒音・振動など、さらには室内の快適性や安全性、健康などの尺度を目に見える形で表現し、議論することが重要である。これらに対して最新の検出技術や評価技術が登場し、新たな課題が発見されることから、室内環境研究の今後のあり方を念頭に本大会のテーマとしたものである。

東京での開催ということで、なかなか訪れることの少ない地方を楽しみにしている会員にとっては、魅力的ではない大会となることから、発表者数、参加者数が激減するのではないかと心配をしていた。しかしながら、発表139件（ポスター発表79件、口頭発表60件）を集め、大会参加者は313名、機器展示には13社にご協力をいただき、例年以上に盛り上げていただくことができた。参加者の皆様に感謝申し上げる。

昨年度の佐賀大会と同様に抄録集の印刷発送は行わず、pdfファイルのダウンロード及び当日目次冊子の配布とした。あらかじめ学会Webサイトに掲載し、パスワードでダウンロードしていただいたが、特に不便はなかったようである。

大会については、例年通り、1日目午前中にポスター発表・説明、並行して環境過敏症分科会によるセミナーを配置した。ポスター発表については、例年全ての発表者に2分間の口頭発表をしていただいていたが、ポスターの件数が大変多かったことから、学生会員のみ実施した。社会人においては、長い時間発表までお待ちいただくのは面倒をおかけすること、学生会員についてはポスター賞がかかっていることから、そのような措置とした。なお、ポスター会場の展示スペースが狭く、ポスター説明時間帯には人口密度が大変高くなり、ご不便をおかけしたことをお詫び申し上げたい。また、昨年と同様に、機器展示の企業の方には、メーカープレゼンテーションを行っていただき、短い時間ではあったが、アピールしていただくようにした。

午後には総会とシンポジウムとした。なお、学生懇談会については総会と並行して開催されたが、詳細は別途報告がある。シンポジウムについては、本大会のテーマである、「室内環境の見える化」について、室内における空気環境、健康・知的生産性を始め、室内空気汚染物質の検出技術や新たなセンサーを用いた計測手法について情報提供いただくことで、見える化した室内環境のその先を見つめていくための機会とし、テーマを「室内環境のその先」とした。基調講演として東京大学名誉教授の加藤信介先生に見える化と室内環境をどう理解して、予測していくかについて、続いて慶應義塾大学の伊香賀俊治先生より、室内環境と健康の見える化について大規模調査より解説いただいた。さらに本学会理事長の東海大学の関根嘉香先生より、生体ガスの計測より新たな化学物質に関する問題提起を、そして電気通信大学の石垣陽先生より、小型のPM_{2.5}センサーを用いた発展途上国における環境改善の活動について紹介していただいた。その後パネルディスカッションを行い、室内環境の今後のあり方について議論を行った。この日の夜は大会懇親会を会場隣の大学食堂で開催したが、立派な会場ではないものの、多くの方に参加していただくことができた。

2日目の午前中は2会場、午後は3会場に分かれて、口頭発表を行い、全ての行事を無事に終了することができた。

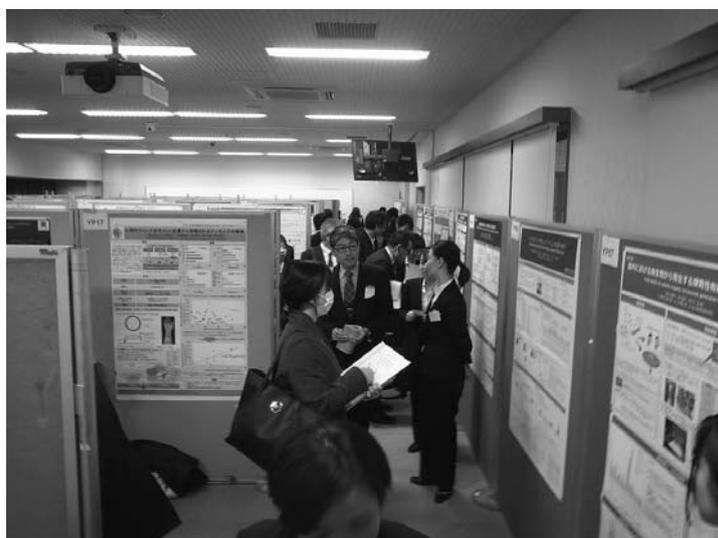
最後に、このように多くの方に参加していただき、盛会に終了することができたことに対し、理事会、学会事務局、そして強力に仕事を分担していただいた実行委員の皆様にご感謝を申し上げます。次回、2019年室内環境学会学術大会は、2019年12月5-7日、沖縄・那覇市において開催の予定である。



会場となった東京工業大学大岡山キャンパス



機器展示会場の様子



ポスター会場の様子



シンポジウム会場（A会場）の様子



懇親会の様子